

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第177集

周防畑遺跡群 南近津遺跡Ⅱ

長野県佐久市南近津遺跡Ⅱ発掘調査報告書

2010. 3

有限会社 田園不動産
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第177集

周防畑遺跡群 南近津遺跡Ⅱ

長野県佐久市南近津遺跡Ⅱ発掘調査報告書

2010.3






有限会社 田園不動産
佐久市教育委員会

例 言

- 1 本書は有限会社田園不動産による宅地造成事業に伴う周防畑遺跡群 南近津遺跡Ⅱの発掘調査報告書である。
- 2 事業主体者 佐久市中込 2975-4 有限会社 田園不動産
- 3 調査主体者 佐久市中込 3056 佐久市教育委員会 教育長
- 4 遺跡名及び発掘調査所在地 周防畑遺跡群 南近津遺跡Ⅱ（NSCⅡ）
佐久市長土呂字南近津 1163-12 他
- 5 調査担当者 上原 学 出澤 力
- 6 本書の編集・執筆 出澤 力
- 7 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

- 1 遺構の略称は以下の通りである。
H-竪穴住居址 D-土抗 M-溝状遺構 Ta-竪穴状遺構 P-ピット
- 2 スクリーントーン表示は以下の通りである。

須恵器断面		黒色処理		赤色塗彩	
焼土		粘土			
- 3 挿図の縮尺は以下の通りである。
遺構-竪穴状遺構・土抗・ピット 1/80
遺物-弥生土器・土師器・須恵器 1/4 鉄製品 1/3 ※そのほかは個々に縮尺を示す
- 4 遺物の写真番号と実測図番号は一致する。
- 5 遺構の標高は各遺構ごとに統一し、水糸高を標高とした。
- 6 調査グリッドは小グリッド4×4m、大グリッド40×40mである。

目 次

例言・凡例

目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査の経緯と経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 遺跡の概要	2
第4節 調査日誌	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	3
第1節 自然環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 基本層序	5
第Ⅲ章 遺構と遺物	7
第1節 竪穴住居址	7
1) H 1号住居址	7
2) H 2号住居址	9
3) H 3号住居址	10
4) H 4号住居址	10
5) H 5号住居址	11
6) H 6号住居址	12
7) H 7号住居址	12
8) H 8号住居址	14
9) H 9号住居址	16
10) H 10号住居址	17
11) H 11号住居址	17
12) H 12号住居址	18
13) H 13号住居址	19
14) H 14号住居址	20
15) H 15号住居址	21
16) H 16号住居址	22
17) H 17号住居址	23
18) H 18号住居址	24
19) H 19号住居址	25
20) H 20号住居址	25
第2節 溝状遺構	26
1) M 1号溝状遺構	26
2) M 2号溝状遺構	26
第3節 竪穴状遺構	27
第4節 土坑	27
第5節 ビット	29
第Ⅳ章 まとめ	30

写真図版

抄 録
奥 付

第1章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査の経緯と経過

南近津遺跡Ⅱは佐久市北部の長土呂地籍、浅間山麓から佐久盆地の平地部に向かって放射状に帯状の低地と台地が展開する「田切り」地形の帯状台地状に存在する。遺跡は南西方向に伸びる帯状台地の西端部分、西側に台地と交互にある帯状低地を臨む位置に存在する。標高は海拔711 m内外を測る。

南近津遺跡Ⅱのある台地には周防畑遺跡群があり、田切り低地を挟んだ西方には西近津遺跡群、東方には長土呂遺跡群、芝宮遺跡群といった遺跡が存在する。上信越自動車道佐久IC及び周辺、国道141号線バイパス沿線中心、また中部横断自動車道の開発など、佐久市北部では大規模なものを含む開発が多数行われ、それに伴い発掘調査も多く実施された。田切台地状に展開するこれらの遺跡は、それらの発掘調査によってその存在が確認されている。

周防畑遺跡群内では周防畑A遺跡、周防畑B遺跡、若宮遺跡Ⅰ・Ⅱ、中仲田遺跡、大豆田遺跡Ⅰ・Ⅱといった遺跡が発掘調査されており、弥生時代後期～平安時代の竪穴住居址、掘立柱建物址、円形周溝墓、甕棺墓等が確認されている。また南近津遺跡Ⅱの東に隣接して南近津遺跡Ⅰの発掘調査が行われており、古墳時代後期から平安時代にかけての集落の存在が明らかとなっている。

今回、有限会社田園不動産の宅地造成計画に伴い試掘調査が実施され、竪穴住居址などによる集落地の存在が認められた。協議の結果、開発対象地の道路部分について記録保存を目的とする発掘調査が行われることとなった。

発掘調査は有限会社田園不動産から委託された佐久市教育委員会が実施した。



第1図 南近津遺跡Ⅱ位置図

第2節 調査体制

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	木内 清 (～平成21年5月)					
			上原 盛夫 (平成21年5月～)					
事務局	社会教育部長	工藤 秀康						
	社会教育次長	金澤 英人 (～平成21年5月)						
	文化財課長	森角 吉晴						
	文化財保護係長	酒井 順一						
	文化財調査係長	三石 宗一						
	文化財保護係	須江久美子	佐々木ふく江					
	文化財調査係	林 幸彦	並木 節子	須藤 隆司	小林 眞寿			
		羽毛田卓也	富沢 一明	神津 格 (～平成21年9月)				
		井出 泰章 (平成21年10月～)	上原 学	出澤 力				
		上原 学	出澤 力					
調査担当者	浅沼ノブ江	阿部 和人	安藤 孝司	市川 明子				
調査員	岩崎 重子	江原 富子	岡村千代美	小幡 弘子				
	菊池 喜重	小井戸秀元	小林百合子	里見 理生				
	土屋 武士	中嶋フクジ	日向 昭次	細益ミスズ				
	本山 慶二	武者 幸彦	比田井久美子	渡辺久美子				
	渡辺 長子	渡辺 学						

第3節 遺跡の概要

調査面積 640㎡

検出遺構

竪穴住居址 20軒 弥生時代後期 5軒 古墳時代 3軒 奈良・平安時代 8軒
不明 4軒

土 坑 8基
溝 址 2条
ピ ッ ト 61基

出土遺物

弥生土器 (鉢・壺・甕・高坏・器台) 土師器 (坏・蓋坏・碗・鉢・甕) 須惠器 (坏・高台付坏・甕) 石製品 (紡錘車・白玉) 金属製品 (鑑方・刀子・釘)

第4節 調査日誌

平成21年5月28日	重機による表土掘削
5月29日	現場作業開始
～6月16日	現場作業終了
平成21年6月16日	整理作業開始
	土器洗浄・注記・上器接合
	図面修正・遺物実測・写真撮影
	報告書編集・執筆
～平成22年3月19日	作業終了

第2章 遺跡の環境

第1節 自然環境

佐久地域は、周辺を山地・台地に囲まれた盆地状を呈し、一般に佐久平と呼ばれ、北には現在も活動を続け白煙を立ち上らせる浅間山、南には蓼科山が存在する。東には北関東山地の北端が延び、群馬県との境をなし、西には御牧原・八重原といった台地が広がっている。そして、佐久平を大きく二分するかのよう一般河川である千曲川が南佐久方面の支流を集めながら水量を増し佐久市内に流れ込む。市内に入った千曲川は野沢付近まで北流した後、やや川筋を北西方向に変え、立科山麓の支流を集めた片貝川、浅間山の麓に源を発す湯川、関東山地からの滑津川等と合流する。

また、佐久地域は地質学的にも南北で大別でき、佐久平のほぼ中央である志賀川が滑津川と合流して千曲川に注ぐ東西線を境とし、河川の北側段丘上と南側沖積地とは10～30mの比高差を持つ断崖を認めることができる。北部地域は、北の浅間山麓末端部の台地で、浅間の噴火によって台地上に厚く軽石流が堆積している。この堆積層は、雨水の浸食によって深くえぐり取られ、浅間の麓から放射状に幾つもの浸食谷（田切り）を形成し、切り立った断崖によって台地を細長く分断している。佐久市北部の遺跡は、主にこの南北方向に延びた田切り地形の台地上に形成されている。

これに対し、南部地域は千曲川の氾濫源沖積地と支流の谷口扇状地となり、河川礫層と沖積粘土層が堆積した比較的安定した土地で、周辺地域は現在も広く水田として利用されている。遺跡は沖積地の微高地上及び、沖積地周辺に張り出す尾根上及び尾根麓付近の緩斜面地等に形成される場合が多い。今回調査対象となった南近津遺跡Ⅱは、北部山切地形の帯状大地地に位置している。

(参考 北佐久郡志 第一巻 自然編)

第2節 歴史的環境

佐久市北部、特に南近津遺跡Ⅱ周辺ではこれまで多くの発掘調査が行われてきたことは前章に述べた。ここでは、周辺で行われた発掘調査を中心に、本遺跡の歴史的環境について概観したい。

まず、本遺跡周辺では旧石器時代の遺跡はほぼ皆無、縄文時代の遺跡についてもほとんど確認されていない。

佐久平北部は浅間山から噴出した火山灰が厚く堆積している。前述した「田切り」地形は水による浸食を受けやすい火山灰台地特有の地形である。この火山性の堆積物は今から11000～14000年前に堆積したのと考えられており、その際に千曲川を堰き止め、佐久平を一時堰き止め湖にしたほど大規模なものであった。このことから、遺跡周辺で旧石器時代の遺跡がほとんど確認されないのは、火山灰の下に埋没している、あるいはそれらに押し流されてしまったものと考えられている。

佐久市周辺では縄文時代の集落が確認されるのは浅間山麓や東山地域、南佐久の山間部などで平地部分での発見は少ない。狩猟・採集によって日々の糧を得ていた縄文時代当時の人々にとって本遺跡周辺のような火山灰台地は生活に適さない土地だったのかもしれない。

弥生時代になると、人々の生活空間は平地部に移るようで、弥生時代中期後半からは大規模な集落跡が本遺跡を含む佐久平北部で発見されている。狩猟採集から稲作中心へと生活様式が変化したことにより狩猟採集に便利な山間部から、水田を営むのに適した平地部に生活空間が移行した結果であると考えられる。

それ以降の集落は基本的に平地部に展開するが、古墳時代後期、そして特に奈良・平安時代になるとその規模は爆発的に拡大し、田切りの帯状台地上全域に広がるような大集落も営まれるようになる。

中世以降については、その調査事例は少ない。本遺跡の北東側には鎌倉時代の館跡とされる長土呂館跡が存在しているが、往時の姿をとどめてはいない。



第2圖 南近津遺跡II 周辺遺跡位置圖 (1:20,000)

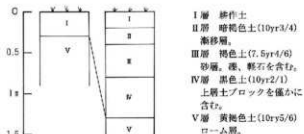
No	遺跡名	所在地	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中世	備考
1	周防浜遺跡群	佐久市長土呂	●	●	●	●		12件の発掘調査
2	近津遺跡群	長土呂	●	●	●	●		H2・H15年本調査
3	西近津遺跡群	長土呂・常田・塚原	●	●	●	●		4件の発掘調査
4	長土呂遺跡群	長土呂	●	●	●	●		22件の発掘調査
5	長土呂遺跡	長土呂					●	
6	枇杷坂遺跡群	岩村田・長土呂		●	●	●		29件の発掘調査
7	藤原遺跡	塚原・常田		●	●	●		H3・H8年本調査
8	藤原古墳群	塚原・常田			●			6件の発掘調査
9	常田西原古墳群	塚原・常田		●	●	●		H6年本調査
10	常田遺跡群	塚原		●	●	●		H6・H8年本調査
11	栗津下古墳群	常田			●			
12	塚地原古墳群	常田			●			S50年本調査
13	大豆田古墳群	塚原			●			
14	松の木遺跡	岩村田		●	●	●	●	H8・9年本調査
15	上和田遺跡	岩村田		●	●	●		
16	岩村田遺跡群	岩村田		●	●	●	●	38件の発掘調査
17	宮一里遺跡群	岩村田		●	●	●		4件の発掘調査
18	根々井大塚古墳	根々井			●			H9年本調査
19	北西久保古墳群	岩村田			●			
20	仲田遺跡	彌久保			●	●		H7・18年度本調査
21	上海澤古墳群	根々井			●			
22	根々井原遺跡群	根々井		●	●	●		
23	根々井遺跡	根々井					●	
24	塚原屋敷遺跡群	塚原				●		
25	高の所遺跡	塚原				●		
26	塚原遺跡	常田		●				
27	遺跡遺跡	塚原				●		
28	森平遺跡	横和		●				
29	肥厚遺跡群	横瀬	●	●	●			
30	大和田原遺跡群	横瀬		●	●			
31	大和田遺跡群	横瀬	●	●	●			H8年本調査
32	藤原古墳	塚原			●			
33	新小石古墳群	塚原			●			
34	藤林古墳群	長土呂			●			

第1表 周辺遺跡一覧表

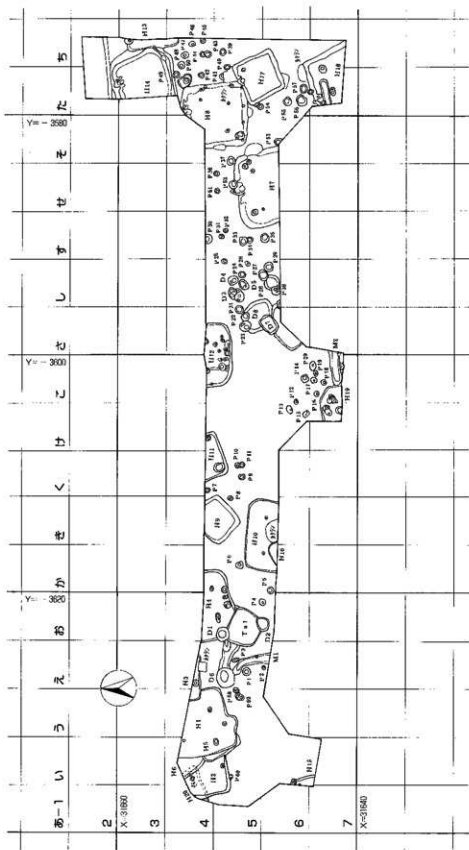
第3節 基本層序

対象地東端と西端の基本層序を示した。対象地東端では河川などの働きによって堆積したと思われる砂層と黒色土層が確認され、それぞれの層上から遺構が確認される。これらの堆積層は西に向かうと少なくなり、西端では耕作土の直下はローム層となり、ローム層が遺構確認面となる。

砂層、黒色土層の堆積は東に隣接する南近津遺跡Iの調査でも確認されており、これらの堆積が対象地より東側に展開していることが分かる。



第3図 基本層序模式図 (右：東端・西：西端)

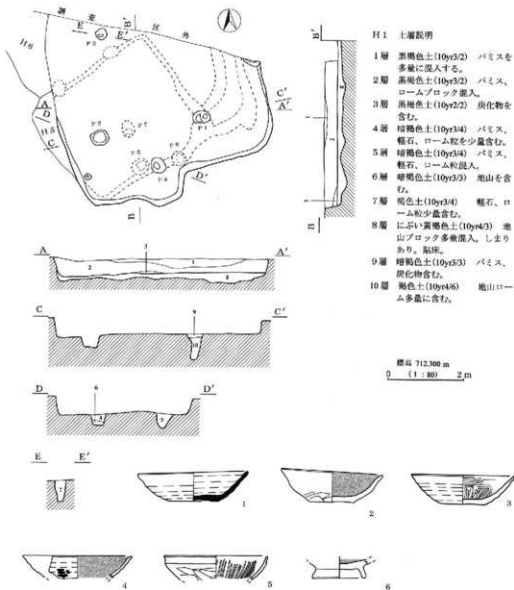


第4図 南近津遺跡Ⅱ 全体図 (1:300)

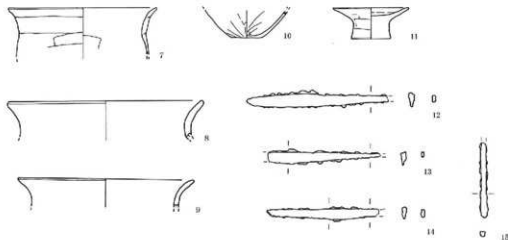
第3章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

1) H1号住居址



第5図 H1号住居址 実測図・出土遺物(1)



第6図 H1号住居址 出土遺物(2)

番号	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整・文様	残存部位	備考
1	須恵器	杯	14.5	6.2	4.3	ロクロナデ 底部回転糸切り	完形	
2	土師器	杯	13.0	5.1	4.1	ロクロナデ 底部回転糸切り後ヘラケズリ	ほぼ完形	内面黒色処理
3	土師器	杯	13.4	5.6	3.7	ロクロナデ 内面ミガキ 底部回転糸切り	40%	
4	土師器	杯	10.4	3.6	3.6	ロクロナデ 内面黒色処理	20%	墨書「玉?」
5	土師器	杯	13.4	-	(3.2)	ロクロナデ 内面ヘラミガキ	20%	混入遺物
6	土師器	高台付杯	-	7.0	(2.0)	底部回転糸切り後ヘラナデー高台付	60%	内面黒色処理
7	土師器	甕	19.2	-	(6.3)	ヘラケズリ 内面ナデ	口縁 20%	
8	土師器	甕	25.0	-	(4.5)	ナデ	口縁 40%	
9	土師器	甕	22.6	-	(3.5)	ナデ	口縁 30%	
10	土師器	甕	-	3.8	(3.5)	ヘラケズリ 内面ヘラナデ	底縁のみ	
11	土師器	器台	10.0	5.0	4.1	ロクロナデ 底部にヘラナデ	50%	火焼の痕跡あり
番号	器種	器形	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	
12	鉄製品	刀子	(12.8)	1.3	0.4	24.2	一部欠損	
13	鉄製品	刀子	(11.0)	1.2	0.4	15.3	一部欠損	
14	鉄製品	刀子	(10.8)	1.2	0.3	13.3	一部欠損	
15	鉄製品	釘	(7.3)	0.4	0.4	6.4	一部欠損	

H1号住居址 遺物観察表

本住居址は対象地西端、いー3・4、うー3・4グリッドに位置する。住居址北側は調査区外となり、合計5軒の住居址との重複関係が認められた。

形態はやや南北方向に長じた方形を呈する。規模は検出規模で南北長5.12m、東西長5.18mを測る。壁高は南壁中央で最大39cm、住居址の床面積は19.6㎡である。覆土は概ね自然堆積。

本住居址のピットは堀方で認めたピットを含めて7基で、P1～3は柱穴。P4～6は南壁中央に確認された入口施設に属するピットである。貼床を確認し、堀方は中央より周辺部分が掘り込まれている。H2・3・5・6・20と重複し、新旧関係ではH3より古く、そのほかの住居址より新しい。

出土遺物は15点を図化した。出土遺物は須恵器杯、土師器杯・高台付杯、甕、器台、鉄製の刀子、釘である。そのほとんどが覆土中、破片での出土であるが、1の須恵器杯は南西コーナー付近でほぼ完形で発見された。5の土師器杯は混入遺物。また4の土師器杯は外面に墨書が認められ、残存する破片では「玉」と推測される文字が認められる。

遺構の重複もあるため混入遺物と思われる物もあるが、概ね9世紀後葉の物と思われる。

2) H2号住居址

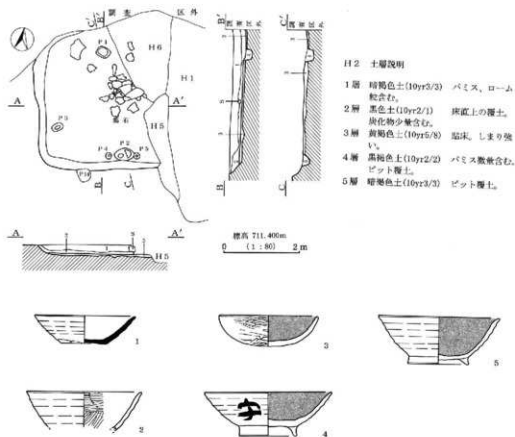
本住居址は対象地西端、あー3・4、いー3・4グリッドに位置する。住居址北側は調査区外となり、合計3軒の住居址との重複関係が認められた。

形態はほぼ方形を呈する。規模は検出規模で南北長3.36m、東西長2.76mを測る。壁は緩やかに落ち込み、壁高は南壁中央で最大32cm、住居址の床面積は9.55㎡である。覆土は概ね自然堆積。

本住居址のピットは堀方で認めたピットを含めて5基で、P1～2は柱穴。P4・5は入口施設に属するピットであると思われる。貼床を確認し良くしめる。住居址中央には廃棄されたと思われる礫がまとまって発見された。H1・5・6と重複し、新旧関係でH1より古く、他より新しい。

出土遺物は5点を図化した。出土遺物は須恵器環、土師器環・碗である。ただし、4・5の土師器碗については、重複するH1の混入遺物である可能性がある。4の土師器碗には「字」の墨書が認められる。

遺構の重複もあるため混入遺物と思われる物もあるが、概ね9世紀前葉の物と思われる。



第7図 H2号住居址 実測図・出土遺物

番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調査・文様	残存部位	備考
1	須置器	杯	13.4	5.8	3.7	ロクロナデ 杯部底面付近にヘラクスリ 底面回転糸切り	50%	底部に火熱痕
2	土師器	杯	15.0	-	5.1	ロクロナデ 内面ミガキ	20%	
3	土師器	杯	13.0	-	(4.0)	外面ミガキ 下半ヘラクスリ 内面黒色処理	20%	
4	土師器	碗	16.4	7.2	5.7	ロクロナデ 内面黒色処理 底面回転糸切り後高台付	80%	製法[?] 胎土産
5	土師器	碗	16.7	7.7	6.2	ロクロナデ 内面黒色処理 底面回転糸切り後高台付	80%	混入遺物

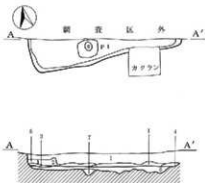
H 2 号住居址 遺物観察表

3) H3号住居址

本住居址は対象地西端、う・えー3グリッドに位置する。住居址北側は調査区外となり、H1と重複関係が認められる。新旧関係ではH1より新しい。

形態は遺構のほとんど調査区外にあたるため明らかではないがほぼ方形を呈する。規模は検出規模で南北長3.68m、東西長0.76mを測る。壁高は南壁中央で最大8cm、住居址の床面積は3.57㎡である。覆土は概ね自然堆積。ピットは堀方で1基のピットを認めた。

遺物は破片のみの出土で図化できる遺物は存在しない。住居址は10世紀前半に当たる。



H3 土層説明

- 1層 増褐色土(10yr3/4) バミス、軽石微量を含む。
- 2層 褐色土(10yr4/6) コーム多く含む。
- 3層 におい黄褐色土(10yr4/3) バミス、軽石微量を含む。
- 4層 増褐色土(10yr3/3) バミス微量を含む。
- 5層 増褐色土(10yr3/3) 軽石少量含む。
- 6層 褐色土(10yr4/4) 地山ローム多量混入。詰米。
- 7層 黒褐色土(10yr3/2) バミス多く含む。ピット覆土。

標高 711.600m
0 (1:80) 2m

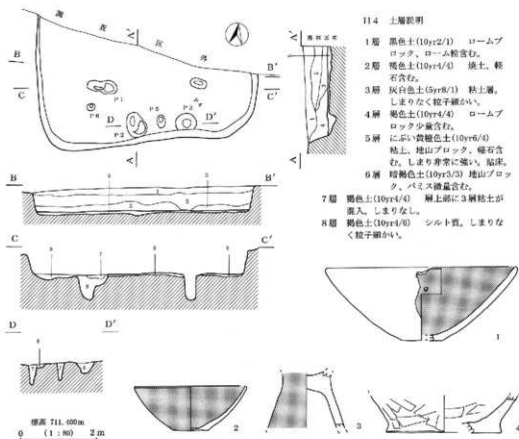
第8図 H3号住居址 実測図

4) H4号住居址

本住居址は対象地西側、おー3・4グリッドに位置する。住居址北側は調査区外となり、T a 1、D 1との重複関係が認められた。新旧関係では本住居址が最も古い。

形態はほぼ方形を呈する。規模は検出規模で南北長3.44m、東西長5.58mを測る。壁高は南壁中央で最大52cm、住居址の床面積は11.5㎡である。本住居址のピットは堀方で認めたピットを含めて6基で、P1・2は柱穴。P3～5は南壁中央に確認された入口施設に属するピットである。粘土を含む非常に良くしまった貼床を確認し、覆土中の3層はきめの細かい粘土層であった。この層は他の住居址では確認されないのでも何らかの理由でこの住居址内に廃棄された物であろう。

出土遺物は4点を図化した。出土遺物は弥生土器で器種は片口鉢、鉢、高杯、甕である。4の甕を除く全てで赤色塗彩を認め、弥生時代後期の物と思われる。



第9図 H4号住居址実測図・出土遺物

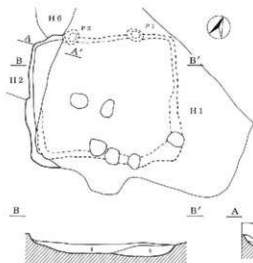
番号	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調査・文様	残存部位	備考
1	弥生土器	片口鉢	13.4	5.8	3.7	ミガキ	40%	赤色塗彩
2	弥生土器	鉢	15.0	—	5.1	ミガキ 片口部分に穿孔	30%	赤色塗彩
3	弥生土器	高杯	13.0	—	(4.0)	赤色塗彩 胴部内面にコナデ		胴部のみ
4	弥生土器	壺	16.4	7.2	5.7	ヘラナデ	底部 20%	

H4号住居址 遺物観察表

5) H5号住居址

本住居址は対象地西端、いー3・4グリッドに位置する。H1・2・6と重複関係にあり、新旧ではH1・2より古く、H6に比して新しい。H1の床下より堀方のみを認め、その形態が明らかとなった。形態は方形を呈する。規模は検出規模で南北長3.44m、東西長3.96mを測る。壁高は南壁中央で最大17cm、住居址の床面積は1.12㎡である。本住居址のピットは2基である。粘床を確認している。

本住居址からの出土遺物はほとんど無く、その所産ははっきりとはしない。少なくともH1とH2よりは古い住居址であろう。



第10図 H5号住居址 実測図

H5 土層説明

- 1層 ぶい黄褐色土(10yr4/3) パミス、軽石少量含む。
- 2層 褐色土(10yr4/4) 地山ブロック多数を含む。
- 3層 暗褐色土(10yr3/3) 薪床、地山ブロック多数に混入、ややしまりあり。
- 4層 暗褐色土(10yr3/3) パミス、軽石多く含む。
- 5層 褐色土(10yr4/6) 地山がマール状に混入する。

6) H6号住居址

本住居址は対象地西端、いー3グリッドに位置する。H1・2・6と重複関係にあり、新田では最も古い。南西コーナー部分のみの出土であり、その形態は明らかではない。規模は検出規模で南北長2.32m、東西長1.64mを測る。H2の床面付近で周溝と僅かな床面を認めたのみであった。住居址の床面積は2.08㎡である。

本住居址からの出土遺物はほとんど無く、覆土中より鉄製の釘を一点認めた。

本住居址の時期ははっきりとはしない。

番号	器種	器形	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
1	鉄製品	釘	(4.9)	0.5	0.3
総計	備考				
3.5	一部欠損				

H6号住居址 遺物観察表



第11図 H6号住居址 実測図・出土遺物

H6 土層説明

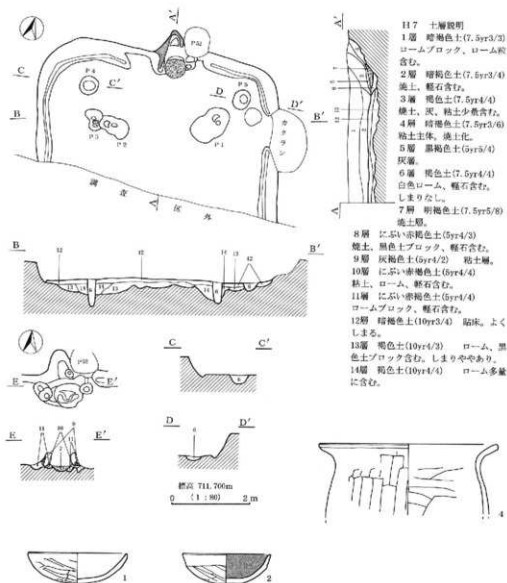
- 1層 黒褐色土(10yr2/3) パミス、軽石多く含む。堀方覆土。上層はややしまる。

7) H7号住居址

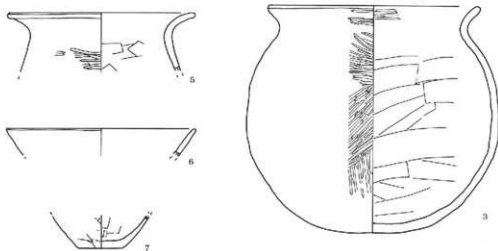
本住居址は対象地東側、す・せ・そー4・5グリッドに位置する。本住居址は基本層序の東側IV層の黒色土上で検出されている。住居址南側は調査区外となり、P52との重複関係が認められ、東壁の一部で果樹の抜根による攪乱を受ける。

形態はほぼ方形を呈すると思われる。規模は検出規模で南北長3.40m、東西長5.40mを測る。壁は緩やかに落ち込み、壁高は西壁中央で最大48cm、住居址の床面積は16.8㎡である。覆土は概ね自然堆積。周溝と良くしまる貼床を認めた。

本住居址のピットは堀方で認めたピットを含めて4基で、P1～3は柱穴で柱痕も認める。カマドは袖部の芯材である礎を認め、火床、構架材である粘土層も確認されている。出土遺物は7点を図化した。出土遺物は土師器環・蓋環・甕である。1の環は完形品である。また3の丸底甕はカマドより破片で出土し、ほぼ完形品となった。遺物から、本住居址は7世紀後半の物と考えられる。



第12図 H7号住居址実測図・出土遺物(1)



第13図 H7号住居址出土遺物(2)

番号	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調査・文様	残存部位	備考
1	土師器	杯	12.6	-	3.9	杯部外沿ヘラケズリ	完形	
2	土師器	高杯	11.4	-	3.8	杯部外沿ヘラケズリ 内面黒色処理	40%	
3	土師器	丸底壺	28.0	-	27.9	外周ミガキ 内面口縁部のみミガキ ほかにナデ	完形	
4	土師器	壺	23.0	-	(9.6)	口縁部ヨコナデ 胴部縦方向ヘラケズリ 内面ナデ	40%	
5	土師器	甕	13.4	-	(3.2)	口縁部ヨコナデ 胴部ミガキ 内面ナデ	20%	
6	土師器	甕	23.4	-	(5.0)	口縁部ヨコナデ	口縁 40%	
7	土師器	甕	-	7.0	(3.0)	ヘラケズリ 内面ナデ	60%	

H7号住居址 遺物観察表

8) H8号住居址

本住居址は対象地東端、そ・た・3・4グリッドに位置する。本住居址は基本層序の東側IV層の黒色土とⅢ層の砂層の中間付近で検出されている。住居址北西コーナーは調査区外となり、H17と重複関係が認められ本住居址の方が新しい。南東コーナーの一部で果樹の抜根による攪乱を受ける。

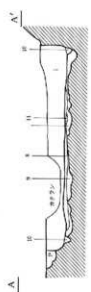
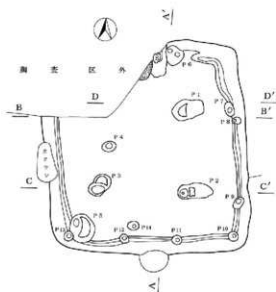
形態はほぼ方形を呈する。規模は検出規模で南北長5.60m、東西長5.32mを測る。壁高は東壁中央で最大61cm、住居址の床面積は14.5㎡である。覆土は概ね自然堆積。周溝と良くしまる貼床を認めた。

本住居址のピットは堀方で認めたピットを含めて14基で、P1～4は主柱穴で柱痕も認める。またP7～13の壁柱も認め、それらが住居址東壁から南西コーナーに掛けて並んでいる。

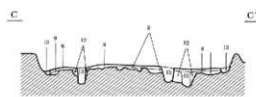
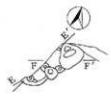
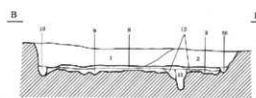
カマドは東側の袖部と火床部の一部のみが検出され、そのほかの部分は調査区外となる。

出土遺物は10点を図化した。出土遺物は須志器環・高台付杯・甕、土師器甕、それと銅製の巡方と思われる金属製品である。これらはほとんどが覆土中より破片の状態で出土した遺物である。巡方は原寸で図示した。

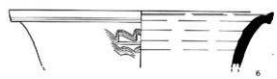
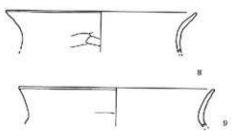
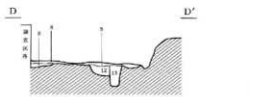
遺物から、本住居址は9世紀前葉の物と考えられる。



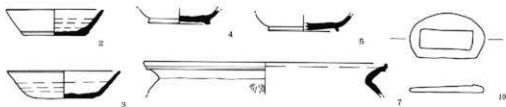
- H8土層説明
- 1層 緑褐色土(7.5yr3/4) ローム状、礫石含む。
 - 2層 褐色土(7.5yr4/2) ローム状、軽石含む。
 - 3層 黒褐色土(5yr2/1) 粘土層。
 - 4層 暗赤褐色土(5yr3/3) 粘土、炭化物含む。
 - 5層 明赤褐色土(2.5yr5/6) 粘土層。
 - 6層 褐色土(7.5yr4/2) 粘土少量含む、灰を含む。
 - 7層 褐色土(7.5yr4/4) ローム多量に含み、粘土含む。しまりあり。
 - 8層 緑褐色土(10yr3/3) 硬質、粘味。
 - 9層 褐色土(10yr4/4) ローム主体、ややしまりあり。
 - 10層 褐色土(7.5yr4/2) しまりなし。
 - 11層 褐色土(2.5yr5/6) 粘土層。
 - 12層 緑褐色土(7.5yr3/4) ロームブロック、軽石含む。ややしまりあり。
 - 13層 暗褐色土(7.5yr3/2) しまりなし。



標高 711.700m
0 (1:80) 2m



第14図 H8号住居址実測図・出土遺物(1)



第15図 H8号住居址出土遺物(2)

番号	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	底高(cm)	調整・文様	残存部位	備考
1	須恵器	杯	12.4	8.6	3.1	ロクロナデ 底部へら切り	50%	
2	須恵器	杯	12.8	7.8	3.3	ロクロナデ 底部へらケズリ	30%	
3	須恵器	杯	14.4	7.6	3.5	ロクロナデ 底部へら切り	20%	火障あり
4	須恵器	高台付杯	-	7.8	(1.8)	底部へら切り後高台付	蓋部のみ	
5	須恵器	高台付杯	-	9.0	(2.0)	底面回転車切り後へらナデ→高台付	20%	
6	須恵器	壺	34.8	-	(7.4)	ロクロナデ 外面に波状文	口縁 10%	
7	須恵器	壺	31.2	-	(4.0)	ロクロナデ 外面にハケメ	口縁 20%	
8	土師器	武藏焼	25.0	-	(5.2)	口縁部ヨコナデ 胴部へらケズリ	口縁 10%	
9	土師器	武藏焼	25.7	-	(4.8)	口縁部ヨコナデ 胴部へらケズリ	口縁 10%	
10	調査品	土方	1.4	2.4	0.1	1.5	須恵器より出土	

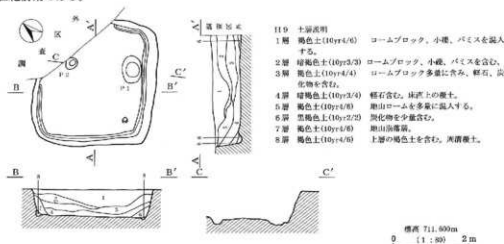
H8号住居址遺物観察表

9) H9号住居址

本住居址は対象地中央部、きー3・4グリッドに位置する。住居址北西コーナー部分が調査区外となる。

形態はほぼ方形を呈する。規模は検出規模で南北長2.88m、東西長2.48mを測る。壁高は南壁中央で最大67cm、住居址の床面積は5.9㎡である。覆土は概ね自然堆積。周溝を認め、床面は地山で貼床等は認められない。本住居址のピットは2基であるが、床からの深さがほとんど無く、これらが柱穴になるとは考えずらい。

遺物は破片のみの出土で図化できる物はない。破片から推測される所産年代は9世紀後葉から10世紀前葉である。



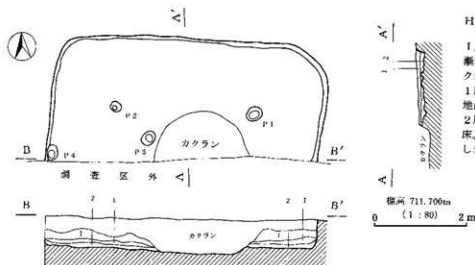
第16図 H9号住居址実測図

10) H 10 号住居址

本住居址は対象地中央部、か・き-4・5グリッドに位置する。住居址南側は調査区外となり、住居址中央に後世の攪乱、また床下にH 16が認められた。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。規模は検出規模で南北長2.60m、東西長5.64mを測る。壁高は北壁中央で最大11cm、住居址の床面積は13.2㎡である。覆土は概ね自然堆積。わずかな貼土を認める。本住居址のピットは4基あり、P1・2が主柱穴となる。

遺物はほとんど認められず、それも破片のみの出土。従って図化できる遺物は存在しない。しかしそれらから住居址の所産時期は弥生時代後期に当たると考えられる。



H10 土層説明

- 1層 黒褐色土(10yr2/3) 垂移層。上層表土のブロックがマーブル状に混入。
- 1層 暗褐色土(10yr3/4) 地山ロームを混入。
- 2層 黄褐色土(10yr5/6) 床。地山ローム混入。ややしまりあり。

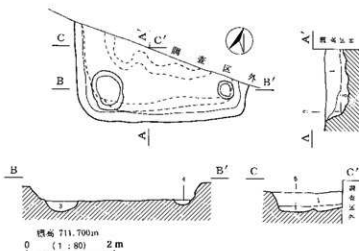
第17図 H 10号住居址実測図

11) H 11 号住居址

本住居址は対象地中央部、く・け-3・4グリッドに位置する。住居址北側は調査区外となる。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。規模は検出規模で南北長1.76m、東西長3.40mを測る。壁高は北壁中央で最大34cm、住居址の床面積は4.4㎡である。覆土は概ね自然堆積。床面と思われる層にはしまりがあり。本住居址のピットは2基あり、それぞれ南東・南西のコーナーにある。堀方は中央部を残し、周辺を深く掘り込んでいる。

遺物はほとんど認められず、それも破片のみの出土。従って図化できる遺物は存在しない。所産時期は9世紀後半と考えられる。



H11土層説明

- 1層 暗褐色土(10yr3/3) パミス、小礫、ロームブロックを含む。
- 2層 黒褐色土(10yr2/3) ロームブロックを多量に混入。
- 3層 暗褐色土(10yr3/4) ロームブロック、炭化物含む。
- 4層 暗褐色土(10yr3/4) ロームブロック少量含む。
- 5層 暗褐色土(10yr3/3) 地山ローム多量に含む。しまりあまりなし。床。

第18図 H 11号住居址実測図

12) H 12 号住居址

本住居址は対象地中央部、こ・さー3・4グリッドに位置する。住居址北側は調査区外となる。

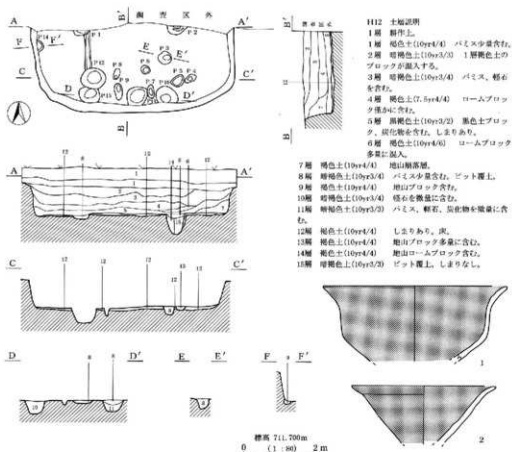
形態はほぼ方形を呈すると考えられる。規模は検出規模で南北長2.10 m、東西長5.24 mを測る。壁高は南壁中央で最大74 cm、住居址の床面積は9.0 m²である。覆土は概ね自然堆積。

本住居址のピットは14基で、P1・2は主柱穴で柱痕も認める。P6～9は入り口に掛ける梯子の柱痕であると考えられる。

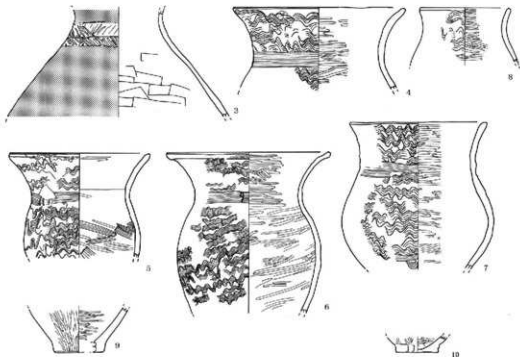
床面は良くしまっている。地山からほとんど厚さはなく、粘床ではなく地山を床面としていたと考えられる。また、P1とP12の間には壁溝と思われる溝が南北に走っている。

出土遺物は10点を図化した。出土遺物は弥生土器で、器種は鉢・高坏・壺・甕(小型甕含む)である。これらはほとんどが覆土中より破片の状態で出土した遺物である。1～3には赤色塗彩が認められ、甕には波状文、籠状文が施されている。

遺物から、本住居址は弥生時代後期の物と考えられる。



第19図 H 12号住居址実測図・出土遺物(1)



第20図 H 12号住居址出土遺物(2)

番号	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	綫装・文様	残存部位	備考
1	弥生土器	鉢	24.0	-	(9.8)	ミガキ	60%	赤色塗彩
2	弥生土器	高杯	18.8	-	(7.4)	ミガキ	牙部 30%	赤色塗彩
3	弥生土器	壺	-	-	(14.1)	ミガキ 内面ヘラナデ	頸部付近 40%	外底赤色塗彩
4	弥生土器	甕	22.4	-	(10.5)	外面波状文 頸部鱗状文 内面ミガキ	口縁・胴部上半	
5	弥生土器	甕	18.0	-	(13.6)	外面波状文 頸部鱗状文 内面ミガキ	口縁・胴部上半	
6	弥生土器	甕	21.2	-	(20.9)	外面波状文 頸部鱗状文 内面ミガキ	口縁・胴部上半	
7	弥生土器	甕	18.0	-	(19.0)	外面波状文 頸部鱗状文 内面ミガキ	口縁・胴部上半	
8	弥生土器	小形甕	11.4	-	(7.6)	外面波状文 内面ミガキ	口縁・胴部上半	
9	弥生土器	甕	-	6.2	(5.5)	内外面ミガキ	底部	胴部下半
10	弥生土器	甕	-	5.5	(1.9)	ミガキ 外底底部一部ヘラナデ	底面のみ	

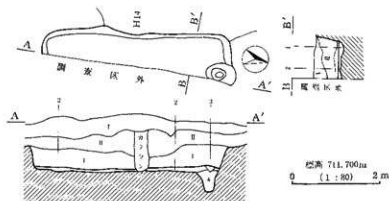
H 12号住居址遺物観察表

13) H 13号住居址

本住居址は対象地東端、ち-2・3グリッドに位置する。住居址東側の大部分が調査区外となる。H 14と重複し、新旧関係では本住居址の方が新しい。東側の基本層序Ⅲ層上で検出され、堀方はⅣ層まで掘り込まれる。

形態はそのほとんどが調査区外となるため明らかではないがほぼ方形を呈すると考えられる。規模は検出規模で南北長3.80m、東西長0.92mを測る。壁高は西壁中央で最大52cm、住居址の床面積は2.8㎡である。覆上は概ね自然堆積。床面と思われる層にはしまりがあまりない。本住居址のピットは北西コーナー壁際に1基を認める。

遺物はほとんど認められず、それも破片のみの出土。従って図化できる遺物は存在しない。所産時期は9世紀前葉に当たると考えられる。



H13 土層説明

- 1層 耕作土。
- 2層 耕作土。
- 3層 暗褐色土(10yr3/3) ローム、軽石を多く含む。
- 4層 暗褐色土(10yr3/2) 硬質、粘床。
- 5層 暗褐色土(10yr4/3) しまりなし。
- 6層 暗褐色土(10yr2/3) ロームブロック、軽石を含む。しまりなし。

第21図 H13号住居址実測図

14) H 14号住居址

本住居址は対象地東端、た・ちー1・2・3グリッドに位置する。本住居址は基本層序の東側Ⅲ層の砂層で検出されている。住居址西側の一部は調査区外となり、H13と重複関係が認められ本住居址の方が古い。北壁の一部で水道管による攪乱を受ける。

形態はほぼ方形を呈する。規模は検出規模で南北長3.83m、東西長3.82mを測る。壁高は東南壁中央で最大76cm、住居址の床面積は11.4㎡である。覆土は概ね自然堆積。周溝と良くしまる粘床を認めた。

本住居址のピットは4基で、P1・2は主柱穴で柱痕も認める。住居址の壁は漏斗状に拡がってから落ち込んでいる。

カマドは天井の石が崩落した状態で確認され、火床部・袖部も一部残存する。

出土遺物は8点を図化した。出土遺物は土師器壺・蓋杯・鉢・小型甕・長胴甕、鉄製の釘。これらはほとんどが覆土中より破片の状態で出土した遺物である。4の小型甕は底部を除きほぼ完形まで復元できた。内外面にハケメが施されている。

遺物から、本住居址は7世紀後半の物と考えられる。

15) H 15号住居址

本住居址は対象地東端、あ・いー5・6グリッドに位置する。住居址北東コーナーを除いて大部分が調査区外となる。形態はそのほとんどが調査区外となるため明らかではないがほぼ方形を呈すると思われる。規模は検出規模で南北長1.94m、東西長0.96mを測る。壁高は西壁中央で最大52cm、住居址の床面積は2.4㎡である。覆土は概ね自然堆積。床面と思われる層にはしまりがあまりない。本住居址のピットは北東コーナー壁際に2基を認める。

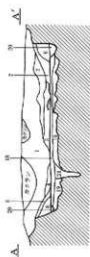
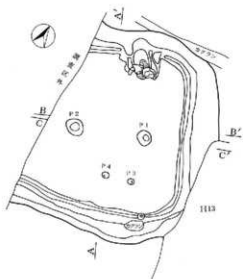
遺物はほとんど認められず、それも破片のみの出土。従って図化できる遺物は存在しない。所産時期ははっきりとしない。



H15 土層説明

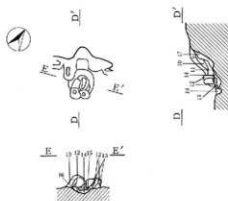
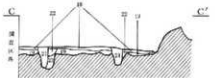
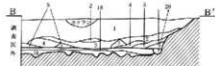
- 1層 耕作土。
- 2層 暗褐色土(10yr3/4) パミ少量含む。
- 3層 暗褐色土(10yr3/4) ロームブロックを多く混入する。
- 4層 暗褐色土(10yr3/3) ロームブロックを含む。
- 5層 暗褐色土(10yr2/3) ロームブロック、炭化物を含む。
- 6層 暗褐色土(10yr3/4) ビット層土。しまりなし。
- 7層 暗褐色土(10yr4/4) ややしまりあり。床。

第22図 H15号住居址実測図



H14 土層説明

- 1層 暗褐色土(10yr3/4) ローム状、軽石やや多く含む。
- 2層 褐色土(10yr4/4) ロームブロック多く含む。
- 3層 褐色土(10yr4/4) ロームブロック多く含む、黒色土ブロック含む。
- 4層 褐色土(7.5yr4/3) ローム、黒色土混合土。
- 5層 黒褐色土(7.5yr3/2) ローム、軽石、粘土を含む。
- 6層 にぶい褐色土(7.5yr5/4) ローム、軽石、粘土を含む。
- 7層 にぶい褐色土(5yr6/4) 粘土ブロック含む。
- 8層 にぶい黄褐色土(10yr5/4) 砂土体、ロームブロック含む。
- 9層 暗褐色土(7.5yr4/3) 粘土、粘土、ローム含む。
- 10層 にぶい赤褐色土(5yr4/4) 粘土、粘土、炭化物多く含む。
- 11層 暗褐色土(7.5yr3/4) 粘土、粘土、炭化物多く含む。
- 12層 にぶい褐色土(7.5yr6/3) 粘土層。
- 13層 暗赤褐色土(5yr2/2) 粘土、粘土多量を含む。
- 14層 暗褐色土(10yr3/3) ローム、黒色土混合土。
- 15層 暗赤褐色土(5.5yr5/0) 粘土層、火灰層。
- 16層 暗褐色土(10yr3/4) ローム状、黒色土を含む。
- 17層 暗褐色土(7.5yr2/2) 粘土、粘土、ロームブロック含む。
- 18層 暗褐色土(10yr2/2) 硬質、結核。
- 19層 暗褐色土(10yr3/4) ローム土塊、黒色土を含む、ややしりりあり。
- 20層 にぶい黄褐色土(10yr4/3) しりりなし。
- 21層 暗褐色土(10yr3/3) しりりなし。
- 22層 暗褐色土(10yr3/3) 暗褐色土と褐色土の混合土。
- 23層 にぶい褐色土(7.5yr5/3) ローム土体、黒色土ブロック含む、ややしりりあり。



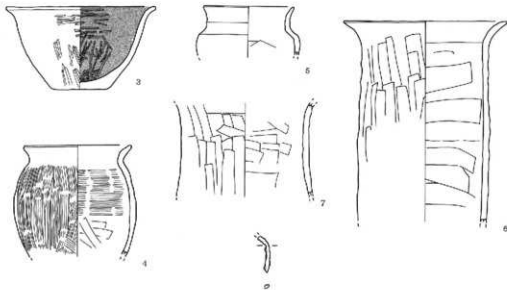
1



2

標高 712.200m
0 (1:80) 2m

第23図 H14号住居址実測図・出土遺物(1)



第24図 H14号住居址出土遺物(2)

番号	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整・文様	残存状況	備考
1	土師器	杯	11.0	-	-	外側ヘラケズリ	40%	
2	土師器	蓋杯	10.2	-	(2.4)	外側ヘラケズリ	20%	
3	土師器	鉢	14.4	7.4	10.8	内外面ヘラミガキ	70%	内面黒色処理
4	土師器	小型壺	14.0	-	(14.5)	口縁部コナデ 外側面ウメ 内面黒土方敷/ウメ 下がヘラナデ	口縁・胴部上半	
5	土師器	小型壺	10.8	-	(6.6)	口縁部コナデ 内面ヘラナデ	10%	
6	土師器	長柄鏝	21.4	-	(25.8)	口縁部コナデ 外側面方向ヘラケズリ 内面ヘラナデ	40%	
7	土師器	長柄鏝	-	-	(11.9)	外側面方向ヘラケズリ 内面ヘラナデ	30%	
8	鉄製品	釘	(3.8)	0.3	0.3	1.3	一部欠損	

H14号住居址遺物観察表

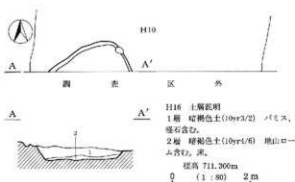
16) H16号住居址

本住居址は対象地東端、かー5グリッドに位置する。H10号住居址の床下から検出され、住居址北東コーナーを除いて大部分が調査区外となる。

形態はそのほとんどが調査区外となるため明らかではないがほぼ方形を呈すると考えられる。規模は検出規模で南北長0.68m、東西長1.68mを測る。壁高は北壁中央で最大24cm、住居址の床面積は2.1㎡である。覆土は概ね自然堆積。

ピットは認められない。

遺物は認められない。所産時期ははっきりとしないが、弥生時代後期以前の住居址であろう。



第25図 H16号住居址実測図

17) H 17号住居址

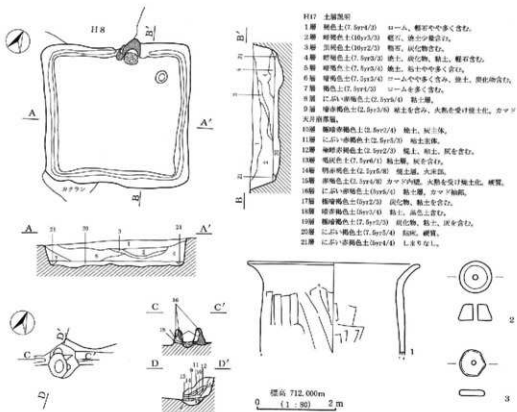
本住居址は対象地東端、た・ち-4・5グリッドに位置する。本住居址は基本層序の東側Ⅲ層の砂層で検出されている。北西コーナー付近で果樹の抜根による攪乱を受ける。H 8と重複関係が認められ本住居址の方が古い。

形態はほぼ方形を呈する。規模は検出規模で南北長3.80 m、東西長3.68 mを測る。壁高は東壁中央で最大58 cm、住居址の床面積は8.6 m²である。覆土は概ね自然堆積。周溝と良くしまる貼床を認めた。本住居址のピットは1基のみで、柱穴は認められなかった。

カマドは火床部と粘土による袖部が一部残存する状態で確認された。

出土遺物は3点を図化した。出土遺物は土師器長胴甕・石製紡錘車と薄玉である。紡錘車は1/4、薄玉は1/2で図示した。

遺物から、本住居址は8世紀前半の物と考えられる。



第26図 H 17号住居址実測図・出土遺物

番号	部 種	部 形	口徑 (cm)	底徑 (cm)	高さ (cm)	調 整 ・ 文 様	残存部位	備 考
1	土師器	長胴甕	22.0	—	(11.4)	口縁部ヨコナデ 外周部方向ヘラケズリ 内周ヘラナデ	40%	
2	石器類	紡錘車	4.2	—	2.0	53.0	薄石製	
3	石器類	薄玉	1.6	1.6	0.3	1.9	一部欠損	

H 17号住居址遺物観察表

18) H 18 号住居址

本住居址は対象地東端、た・ち-5・6グリッドに位置する。本住居址は基本層序の東側Ⅲ層の砂層で検出されている。北東コーナー付近で果樹の抜根による攪乱を受ける。北東コーナー付近以外の部分は調査区外となる。

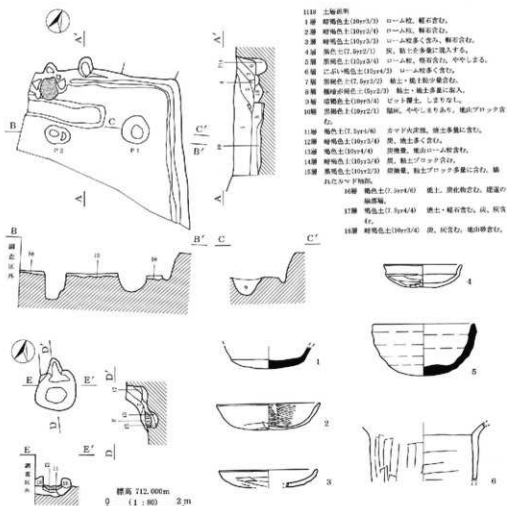
形態はそのほとんどが調査区外となるため明らかではないがほぼ方形を呈する。規模は検出規模で南北長3.21m、東西長3.80mを測る。壁高は東壁で最大64cm。住居址の床面積は8.9m²である。覆土は概ね自然堆積だが、5層は新たに貼り直された床面である可能性がある。周溝があり、下の貼床である10層は良くしまっている。

本住居址のピットは2基で、これらが柱穴になろう。

カマドはピットの位置からすると北壁中央からやや西寄りにあると考えられる。火床部と袖部が一部残存し、カマドの南側にある溝状の落ち込みの中には多量の焼土や灰が堆積していた。

出土遺物は6点を図化した。出土遺物は須恵器杯・鉢、土師器杯・蓋環・長胴甕である。

遺物から、本住居址は7世紀後半の物と考えられる。



- 11層 土層不明
- 1層 暗褐色土(10a-c/3) ローム状、軽石含む。
 - 2層 暗褐色土(10b-c/3) ローム状、軽石含む。
 - 3層 暗褐色土(10y-z/3) ローム状多量含む、軽石含む。
 - 4層 灰色土(7.8y/2/1) 灰、軽石多量に混入する。
 - 5層 黄褐色土(10y-z/3) ローム状、軽石含む、ややしまる。
 - 6層 濃い褐色土(10y-z/3) ローム状多量含む。
 - 7層 黄褐色土(7.8y/3/2) 粘土・軽石少量を含む。
 - 8層 暗緑の褐色土(5y-z/2) 粘土・焼土多量に混入。
 - 9層 暗褐色土(10y-z/3) ピット層土、しまりなし。
 - 10層 黄褐色土(10y-z/3) 細砂、ややしまりあり。建込ブロック含む。
 - 11層 褐色土(7.3y-z/4) カマド火床部。焼土多量を含む。
 - 12層 暗褐色土(10y-z/4) 灰、焼土多量を含む。
 - 13層 褐色土(10y-z/4) 炭塊殻、地山ローム状含む。
 - 14層 暗褐色土(10y-z/4) 灰、焼土ブロック含む。
 - 15層 黄褐色土(10y-z/3) 細砂質、粘土ブロック多量を含む。焼きたカマド残部。
 - 16層 褐色土(7.3y-z/4) 粘土、炭化物含む。建込の細砂質。
 - 17層 褐色土(7.3y-z/4) 粘土・軽石含む。灰、灰含む。
 - 18層 暗褐色土(10a-c/4) 灰、灰含む、地山砂含む。

第27図 H 18号住居址実測図・出土遺物

番号	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	製法・文様	残存部位	備考
1	土師器	杯	-	-	(2.8)	ロクロナデ 底部ヘラケズリ後ヘラナデ	底面のみ	
2	土師器	杯	13.6	-	(3.4)	ロクロナデ 杯部〜底部ヘラケズリ 内面ミガキ	20%	
3	土師器	壺形	12.8	-	(2.2)	ロクロナデ 杯部ヘラケズリ	30%	
4	土師器	高杯	10.0	-	3.0	ロクロナデ 杯部〜底部ヘラケズリ	20%	
5	須弥座	鉢	13.4	-	6.7	ロクロナデ 底部に「×」の線刻	10%	
6	土師器	長形壺	-	-	(6.1)	外周縦方向ヘラケズリ 内面ヘラナデ	20%	

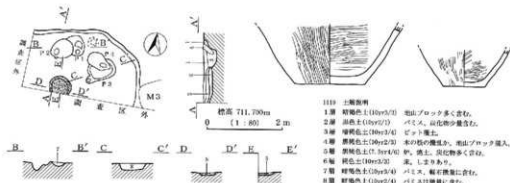
H 18号住居址遺物観察表

19) H 19号住居址

本住居址は対象地中央部、け・こー6グリッドに位置する。住居址北東コーナーを除く大部分が調査区外となる。M2と僅かに重複し、新旧関係では本住居址の方が古い。

形態はそのほとんどが調査区外となるため明らかではないがほぼ方形を呈すると考えられる。規模は検出規模で南北長1.72m、東西長2.96mを測る。壁高は北壁で最大8cm、住居址の床面積は4.4㎡である。覆土は概ね自然堆積。床面と思われる層はしまりがある。本住居址のピットは5基を認める。また、住居址中央に炬を確認した。

遺物は2点を図化した。どちらも土師器の甕の底部である。本住居址は弥生時代後期の物と考えられる。



第28図 H 19号住居址実測図・出土遺物

番号	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	製法・文様	残存部位	備考
1	土師器	甕	-	9.0	(7.5)	内外面ミガキ	底面のみ	
2	土師器	甕	-	5.6	(4.8)	内外面ミガキ	底面のみ	

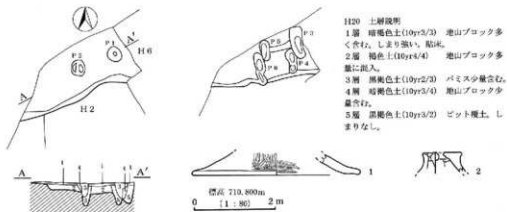
H 19号住居址遺物観察表

20) H 20号住居址

本住居址は対象地東端、あ・いー3グリッドに位置する。住居址南東コーナーを除く大部分が調査区外となる。H2・6の床下より発見された。

形態はそのほとんどが調査区外となるため明らかではないがほぼ方形を呈すると考えられる。規模は検出規模で南北長1.72m、東西長1.40mを測る。床面からの出土であるため壁高は不明。住居址の床面積は2.91㎡である。床面と思われる層はしまりがある。本住居址のピットは7基を認め、入口施設に関係する物と思われる。

遺物は2点を図化した。土師器の器台と高杯の脚部。本住居址の所産時期は明らかではない。



第29図 H 20号住居址実測図・出土遺物

番号	種類	形状	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	調査・文様	残存割合	備考
1	土師器	高杯	—	20.4	(2.8)	内外面ミガキ	基部 20%	
2	土師器	蓋台	4.7	—	(2.4)	外面ヘラケズリ、内面ヘラナテ 中央に穿孔	20%	

H 20号住居址遺物観察表

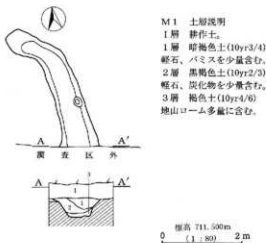
第2節 溝状遺構

1) M1号溝状遺構

本遺構はえー4・5グリッドから検出された。南北方向に伸び、北側では西に向かって屈曲している。

規模は幅が81cm、深さは42cmを測る。底部の幅は54cmで底部の形状は不規則である。

遺物はほとんど確認されず、その不規則な形状から、自然流路の可能性が高い。

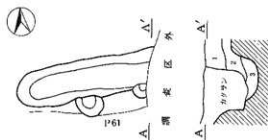


第30図 M 1号溝状遺構実測図

2) M2号溝状遺構

本遺構はこー6グリッドから検出された。東西方向に伸びH 19と重複、南側の一部を攪乱により破壊されている。規模は幅が84cm、深さは60cmを測る。底部の幅は44cm。

遺物はほとんど確認されず、所産時期は不明である。



M2 土層説明

- 1層 暗褐色土(10yr3/4) 軽石、バミスを少量含む。
- 2層 黒褐色土(10yr2/3) 軽石、炭化物を少量含む。
- 3層 褐色土(10yr4/6) 地山ローム多量を含む。

標高 711.700m
0 (1:80) 2m

第31図 M2号溝状遺構実測図

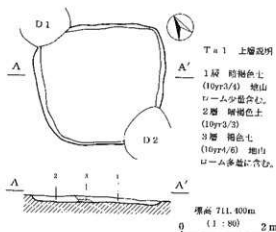
第3節 竪穴状遺構

Ta1号竪穴状遺構

本遺構は対象地西側、え・お-4・5グリッドに位置する。自然流路、D1・2、H4と重複し、それらの中で本遺構が最も古い。

形態はほぼ方形を呈する。規模は検出規模で南北長2.60m、東西長3.03mを測る。壁高は西壁中央で12cm。

遺物に凶化できる物はなく、量もごく僅かである。従ってその所産時期は明らかではない。



Ta1 土層説明

- 1層 暗褐色土(10yr3/4) 地山ローム少量含む。
- 2層 褐色土(10yr3/3)
- 3層 褐色土(10yr4/6) 地山ローム多量を含む。

標高 711.400m
0 (1:80) 2m

第32図 Ta1号竪穴状遺構実測図

第4節 土坑

本遺跡で出土した土坑は8基である。

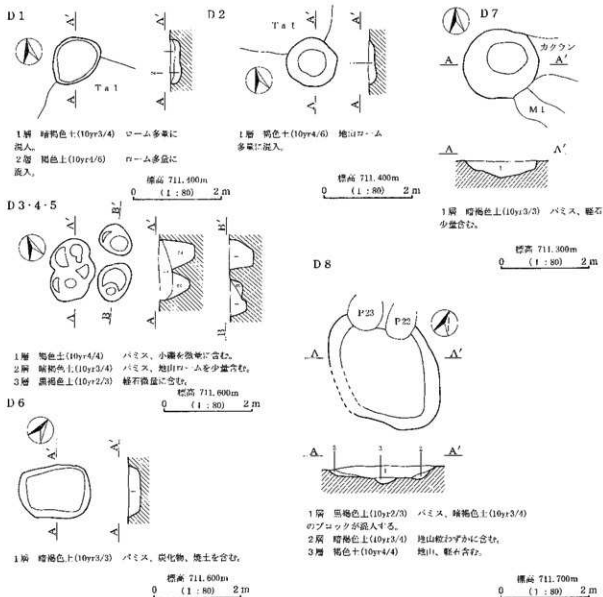
D1・2はえ-4・5グリッドに位置する。Ta1に重複し、新旧関係では上坑の方が新しい。それぞれ円形を呈し規模は直径がそれぞれ104cm・112cm、深さは28cm・18cmを測る。

D3・4・5はし-4グリッドにまとまって位置する。D3はピットを二つ重ねたような形状をもち、4・5はそれぞれテラスを有する円形。規模はD3で長軸長144cm・短軸長96cm、深さは88cm。D4・5は直径96cmと71cm、深さは38cmと55cmを測る。

D6は楕円形でさ-4・5グリッドに位置する。D8に重複し新旧関係は本遺構の方が新しい。規模は長軸長164cm・短軸長117cm、深さは27cmを測る。

D7はえ-4グリッドに位置し、M1などの自然流路に重複している。形状は円形。規模は直径で169cm、深さは37cmを測る。

D8はD6と重複し、またP22・23にも切られている。隅丸方形を呈し、規模は長軸長284cm・短軸長233cm、深さは42cmを測る。



第33図 D1～8号土坑実測図

第5節 ビット

本遺跡で確認されたビットは合計で61基を数える。これらを一覧表で示した。

取	法 量 (cm)			形 態	層 土	備 考 関係
	径径	径径	深さ			
1	59	-	46	円 形	黒褐色土 (10yr2/3)	
2	34	-	13	円 形	赤褐色土 (10yr3/3)	
3	61	33	17	楕円形	暗褐色土 (10yr3/3)	
4	48	-	35	円 形	暗褐色土 (10yr3/3)	
5	57	-	27	円 形	暗褐色土 (10yr3/4)	
6	54	-	35	円 形	暗褐色土 (10yr3/4)	
7	(50)	40	14	楕円形	暗褐色土 (10yr3/4)	北条調査区外
8	35	-	30	円 形	黒褐色土 (10yr2/3)	
9	55	33	14	楕円形	黒褐色土 (10yr2/3)	
10	42	-	23	円 形	黒褐色土 (10yr2/3)	P 11 を切る
11	41	-	14	円 形	黒褐色土 (10yr2/3)	P 10 に交差する。
12	55	-	43	円 形	褐色土 (10yr3/4)	
13	40	-	20	円 形	褐色土 (10yr3/4)	
14	57	-	26	円 形	褐色土 (10yr3/4)	
15	63	44	37	不整形	暗褐色土 (10yr3/4)	
16	46	36	29	楕円形	暗褐色土 (10yr3/4)	
17	48	-	46	円 形	暗褐色土 (10yr3/3)	
18	46	-	28	円 形	暗褐色土 (10yr3/3)	
19	35	-	18	円 形	暗褐色土 (10yr3/3)	
20	74	51	37	楕円形	暗褐色土 (10yr3/3)	
21	60	-	29	円 形	暗褐色土 (10yr3/4)	
22	63	-	54	円 形	暗褐色土 (10yr3/4)	P 23 を切る
23	93	-	74	円 形	暗褐色土 (10yr3/3)	P 22 に交差する
24	45	-	35	円 形	褐色土 (7.5yr4/4)	
25	47	-	26	円 形	褐色土 (7.5yr4/4)	
26	36	-	33	円 形	褐色土 (7.5yr4/4)	
27	94	-	52	円 形	褐色土 (7.5yr4/4)	P 28 を切る
28	120	105	40	楕円形	にぶい褐色土 (10yr4/3)	P 27・38 に切られる
29	67	-	44	円 形	褐色土 (7.5yr4/4)	
30	74	-	84	円 形	にぶい褐色土 (10yr4/3)	一部調査区外
31	38	-	43	円 形	褐色土 (7.5yr4/4)	
32	34	-	37	円 形	にぶい褐色土 (10yr4/3)	
33	64	-	24	円 形	褐色土 (7.5yr4/4)	
34	45	-	25	円 形	褐色土 (7.5yr4/4)	
35	64	-	25	円 形	褐色土 (7.5yr4/4)	
36	44	-	30	楕円形	にぶい褐色土 (10yr4/3)	
37	62	-	38	円 形	褐色土 (7.5yr4/4)	
38	72	-	59	不整形	褐色土 (7.5yr4/4)	P 29 を切る
39	48	-	54	円 形	黒褐色土 (10yr2/3)	
40	49	-	30	円 形	黒褐色土 (10yr2/3)	
41	50	-	26	円 形	暗褐色土 (10yr3/4)	カクランに切られる
42	40	-	19	円 形	暗褐色土 (10yr3/4)	
43	53	-	42	円 形	暗褐色土 (10yr3/4)	P 44 を切る。
44	45	-	24	円 形	暗褐色土 (10yr3/4)	P 43 に切られる
45	38	-	70	円 形	暗褐色土 (10yr3/4)	一部調査区外
46	45	-	37	円 形	褐色土 (10yr3/4)	
47	54	-	31	円 形	褐色土 (10yr3/4)	
48	62	-	61	円 形	暗褐色土 (10yr3/4)	
49	48	-	41	円 形	暗褐色土 (10yr3/4)	H 14 に切られる
50	130	90	54	不整形	暗褐色土 (10yr3/4)	
51	30	-	34	円 形	暗褐色土 (10yr3/4)	
52	(66)	-	56	円 形	褐色土 (7.5yr4/4)	H 7 に切られる
53	(55)	54	23	楕円形	暗褐色土 (10yr3/4)	一部調査区外
54	45	-	34	円 形	暗褐色土 (10yr3/4)	H 17 に切られる
55	56	-	33	円 形	暗褐色土 (10yr3/4)	
56	93	-	29	不整形	暗褐色土 (10yr3/4)	
57	60	52	25	楕円形	暗褐色土 (10yr3/4)	
58	51	38	21	楕円形	暗褐色土 (10yr3/3)	
59	70	48	35	楕円形	暗褐色土 (10yr3/3)	
60	34	-	36	円 形	暗褐色土 (10yr3/3)	H 2 を切る
61	57	-	31	円 形	暗褐色土 (10yr3/4)	M 2 に切られる

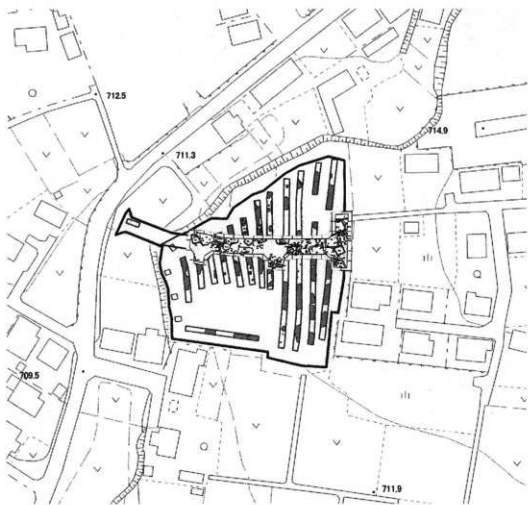
南近津遺跡Ⅱビット一覧表

第4章 まとめ

今回調査で確認された住居址は、弥生時代後期に当たる住居址、古墳時代後期である7世紀後半に当たる住居址、奈良・平安時代の住居址という3つの時期に大別することが出来る。これは、当地において少なくともこの3つの時期に集落が営まれていたことを示す物である。また、住居址の分布では7世紀後半の住居址は主に調査対象地東側に集中して確認された。

実際、今回調査された対象地の北東で平成9年度に調査された南近津遺跡Ⅰの調査でもこれらの時期の住居址が確認されており、本遺跡の存在する田切台地上の西端部分に3つの時期にそれぞれ集落が広がっていたことが明らかとなった。そしてその集落の広がりは今後周辺で行われる開発に伴う発掘調査により、さらにはっきりとした物になるであろう。

最後に、今回の発掘調査に当たってご協力を賜った開発主体者様、近隣の住民のみなさまに御礼申し上げ、筆を置かせていただきたいと思います。



第34図 南近津遺跡Ⅱ調査概略図(1:2,500)



H1号住居址 (南から)



H1号住居址堀方 (南から)



H2号住居址 (東から)



H2号住居址堀方 (南から)



H3号住居址 (南から)



H3号住居址堀方 (南から)



H4号住居址 (西から)



H4号住居址堀方 (西から)



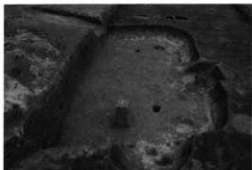
H 5号住居址 (東から)



H 6号住居址 (東から)



H 5・6号住居址堀方 (西から)



H 7号住居址 (東から)



H 7号住居址カマド (南から)



H 7号住居址カマド堀方 (南から)



H 7号住居址出土土製製品 (南から)



H 16号住居址堀方 (西から)



H 8号住居址 (南から)



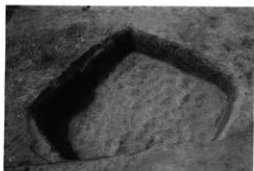
H 8号住居址カマド (南から)



H 8号住居址堀方 (南から)



H 9号住居址 (西から)



H 9号住居址堀方 (北から)



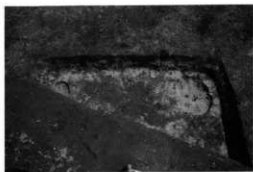
H 10号住居址 (西から)



H 10号住居址堀方・H 16号住居址 (西から)



H 16号住居址堀方 (西から)



H 11号住居址(北から)



H 11号住居址堀方(北から)



H 12号住居址遺物出土状況(西から)



H 12号住居址(西から)



H 12号住居址堀方(西から)



H 13号住居址(南から)



H 13号住居址堀方(南から)



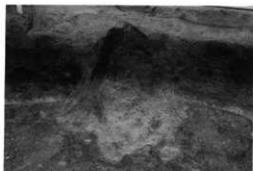
調査風景(東から)



H 14号住居址 (南から)



H 14号住居址カマド (南から)



H 14号住居址カマド堀方 (南から)



H 14号住居址堀方 (東から)



H 15号住居址 (南から)



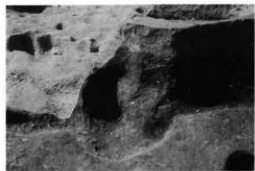
H 15号住居址堀方 (南から)



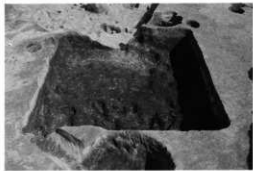
H 17号住居址 (南から)



H 17号住居址カマド (南から)



H 17 号住居址カマド堀方 (南から)



H 17 号住居址堀方 (南から)



H 18 号住居址 (南から)



H 18 号住居址カマド (南から)



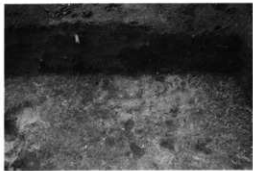
H 18 号住居址出土須恵器 (東から)



H 18 号住居址カマド堀方 (南から)



H 19 号住居址 (西から)



H 19 号住居址^跡 (北から)



H 19号住居址堀方 (南から)



H 20号住居址 (南から)



H 20号住居址堀方 (南から)



M 1号溝状遺構 (北から)



M 2号溝状遺構 (西から)



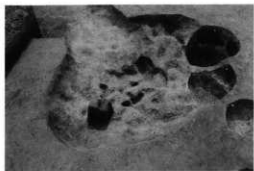
D 1号土坑 (西から)



D 2号土坑 (西から)



D 7号土坑 (西から)



D8号土坑 (南から)



Ta1号竪穴状遺構 (南から)



調査区中央部分 (北から)



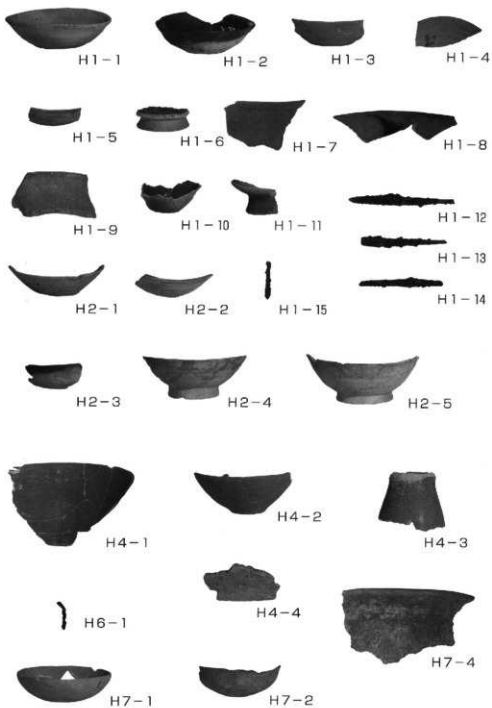
調査区遠景 (西から)



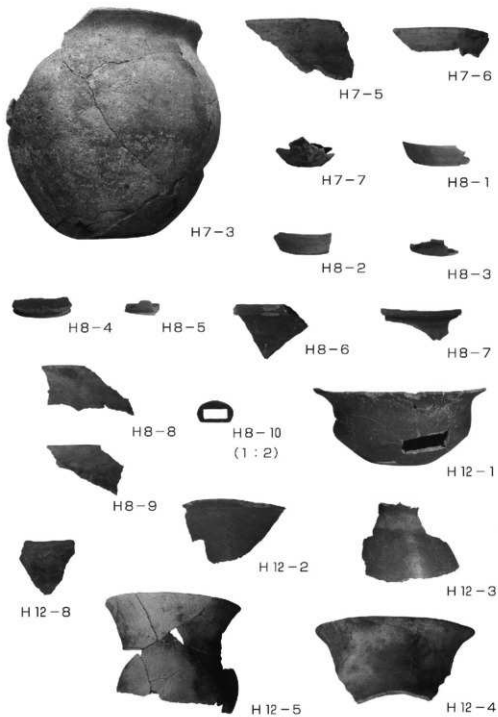
調査区東側部分 (北から)



調査区遠景 (西から)



南近津遺跡Ⅱ出土遺物(1)



南近津遺跡Ⅱ出土遺物(2)



H 17-3 (1:2)

南近津遺跡Ⅱ出土遺物 (3)



H 18-2



H 18-3



H 18-4



H 18-6



H 19-1



H 19-2



H 18-5



H 20-1



H 20-2

南近津遺跡Ⅱ出土遺物(4)

報 告 書 抄 録

書 名	周防畑遺跡群 南近津遺跡Ⅱ
ふりがな	すほうばたいせきぐん みなみちかついせきに
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第177集
編集者名	出澤 力
編集・発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2010.3.19
郵便番号	385-0066
電話番号	0267-68-7321
住 所	長野県佐久市志賀 5953
遺 跡 名	周防畑遺跡群 南近津遺跡Ⅱ (NSCⅡ)
遺跡所在地	佐久市長土呂字南近津 1163-12 他
遺跡番号	432
経 度	36° 17' 9"
緯 度	138° 27' 38"
調査期間	2009.5.28 ~ 2009.6.16 (現場) 2009.6.16 ~ 2010.3.19 (整理)
調査面積	640㎡
調査原因	宅地造成
種 別	集落址
主な時代	弥生時代・古墳時代・奈良・平安時代
遺跡概要	遺構 竪穴住居址件 (弥生・古墳・奈良・平安) 溝状遺構 土坑 竪穴状遺構 ビット 遺物 弥生土器 (鉢・壺・甕・高坏・器台) 土師器 (坏・蓋坏・碗・甕) 須恵器 (坏・高台付坏・甕) 石製品 金属製品 (巡方・刀子・釘)
特記事項	

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第177集

周防畑遺跡群 南近津遺跡Ⅱ

編集・発行 佐久市教育委員会
〒385-8501 長野県佐久市中込3056
文化財課
〒385-0006 長野県佐久市志賀5953
TEL. 0267-68-7321

印刷所 株式会社 佐久印刷所